

リレー随筆

## ツルとラジオとマラソン

県立大島病院 初期臨床研修医 徳田 弘幸

はじめまして。県立大島病院初期臨床研修医の、徳田弘幸と申します。よろしくお願ひ致します。

県立大島病院は、奄美市の市街地である名瀬に位置しており、海の玄関口である名瀬港からすぐのところです。奄美にせっかく來たので、島のことをいろいろと書かせていただきたかったのですが、思い返すとこの一年間、休日や当直明けの日は寝てばかりいたことに気が付きました。

そのため今回は、地元の話や趣味の話など、書かせていただければと思います。

私の出身地は出水市というところで、熊本県との県境に位置しています。出水は東を標高が1,000mある紫尾山に、西を天草諸島や八代海に囲まれた、平野の広がるおだやかな土地です。

九州新幹線が全線開業したのはもう10年前ですが、最近では道路の面での整備も進んでおります。南からは阿久根～出水が高速道路でつながり、北は熊本市から隣町の水俣まで高速道路で結ばれつつあり、水俣出水間も近いうちに開通する予定です。鹿児島県の北の端には位置していますが交通の便は割とよく、私も臨床実習が始まる直前の大学4年までは新幹線で通学していました。

昨年末、奄美大島のすぐ東にある喜界島へナベヅルが飛来したというニュースを目にしました。なんだか遠い旅先で、同郷の人に出会ったような気持ちになりました。

出水平野には冬の度にツルがやってきます。

大学生になって鹿児島市へ来た際に感じたことは、多くの方がツルといったら日本昔ばなしに出てくるタンチョウヅルを思い浮かべるのだなあということでした。今年はタンチョウヅルが16年ぶりに出水へやってきたというニュースを目にしました。北海道に主に生息するタンチョウヅルは、全体に真っ白な羽をもつ鳥で、大きさが2m近くと日本に生息する野鳥でたしか最大級であったかと思います。対して出水にやって来るツルは、マナヅルやナベヅルが主で、首は白く、羽はシルバーがかったものが多いです。

ツルは11月ごろにシベリアなど北の方からやってきて、翌年の2・3月ごろまで越冬のため滞在しています。出水にいる間ツルたちは、夜は周りを水路で囲まれた干拓地のねぐらにいます。日中は干拓地にとどまるものもいれば、出水や阿久根のいろいろな田んぼへ方々に飛びたって餌をついばんで過ごしているものもいたりと、様々です。干拓地にはツル観察センターがあり、日の出とともに一斉にねぐらから飛び立つ様子や、日中もたくさんのツルが集まっている姿が観察できます。私は、市内各地の田畠に数羽で集まり餌を食べたり休んだりしているツルを、自分で探してうろうろするのが好きでした。

ツルの夫婦は主に、1羽もしくは2羽の子を育てるといわれています。家族と思われる群れを見つけたとき、こどもを見分ける方法は簡単です。大きさが親鳥に比べて小さいこともそうですが、幼鳥は頭が茶色いという特徴

があります。3, 4羽のツルの家族がいたり、2羽でいる新婚もしくは子育てを終えてひと段落ついたツルがいたり、一羽でいる独り身のツルがいたりと様々です。

ツルの夫婦はとても仲がよく、一度つがいになったら、生涯ともに暮らすということです。だいぶ前のことらしいのですが、以前こんなお話を聞いたことがあります。あるとき一組のツルの夫婦のうち片方が怪我をして保護されました。そのときもう片方のツルは、保護舎のまわりを旋回しながらずっと鳴いていました。春になって周りのツルが帰っていく中でも、このツルは5月まで出水平野に残り続けました。そして次の冬、シベリアから帰ってきたツルと出水で保護されていたツルとは無事に出会い、仲良く出水平野で冬を越したということです。

2月頃になると、ツルたちは徐々にシベリア方面へ帰っていきます。これを「北帰行（ほっきこう）」といいます。以前大学での臨床実習の際に、ある科の先生とお話をしていました。その先生はツルがたいへんお好きとのことで、よく出水にもいらっしゃるというお話をしてくださいました。北帰行の話となり、最後に「君も出水にツルに乗って帰るんか？」と質問頂いたので、「『つばめ』に乗って帰ります」とお返事した記憶があります。すると「うまいなあ」と笑顔で返してくださいました。

奄美にきてから嬉しかった出来事のひとつが、ラジオに出演できたことです。「あまみエフエム」という奄美市内をカバーするするコミュニティFM局があり、そちらの夕方の番組に大島病院の研修医が交代で、ゲストで出演させていただけたことになったからです。夕方フレンズという25分間ほどのコーナーでした。小さい頃からずっと好きだったラジオに実際に出ることができて、緊張よりも嬉し

さが強かったです。

私は小さいときから、ラジオが身近にある生活を送っていました。実家ではいつも朝から、リビングや台所でラジオをかけていることが多かったです。今でも朝はラジオを付けていることが多く、毎朝たいてい決まった番組をかけています。そのため、このコーナーが流れているから今何時くらいだ、まだ時間に余裕がある、もっといそがなきゃ、といった時計のような役割も果たしてくれています。小学生の高学年頃からは、自分でもラジオを聞くようになっていきました。テレビでこの曜日はこの番組、というのがあるように、私はラジオでそのような番組が多かったです。好きだった番組はオールナイトニッポン（特に毎週土曜日に福山雅治さんがされていた『魂のラジオ』）やFMシアター、JET STREAMなどでした。長期休みには、普段は聞けない地元局お昼の番組、城山スズメを聞くのが好きでした。深夜ラジオは好きで、高校生の頃は3時頃まで聴いていることも多くありました。夜、ひとりで布団の中にいたり勉強しているながらにして、東京からの電波に乗ってくる音楽やトークを聞く、そして全国のいろいろな土地でいろいろな人が同じ時間に聞いている、それがなんだかいいなあと感じていたのかもしれません。

ラジオは身近にアクセスできて、また聴いている側の想像力でどこまでも広げられるものです。ラジオで伝えられるのは音の情報のみです。送り手側は、構成やトーク、選曲など様々な努力や工夫をされているのだろうなあとふと感じました。

奄美に行ったら、群島内のマラソン大会に出てみたいなと思っていましたが、この一年間はなかなか開催されませんでした。趣味と言える程ではないですが、私はマラソンが好きです。大学3年生の頃から大会に出始めま

[隨筆・その他]

した。これまでに種子島ロケットマラソン、出水ツルマラソン、あくねボンタンロードレース、いぶすき菜の花マラソンに参加しました。高低差や風景など、一つとして同じコースはないので、どの大会もとても魅力的です。

走っている最中はきついですが、それ以上に感じるのは、沿道から頂ける応援は本当に力になるということです。知っている人から、知らない人からに関わらず、とても励みになります。様々な大会に出る度に、毎回実感しています。走り終えたあと、私の中では達成感よりも疲労感のほうが圧倒的に大きいです。それでもしばらく時間が経てば、また走りたいなと思ってしまいます。

母校の出水高校では、毎年冬に25kmの競走歩大会がありました。走りながらか走り終えたあとには覚えていませんが、ふと思ったことがあります。きつても諦めずに走りきれば、最後になんとかゴールはできるのはいいなと、ということです。これが私がマラソンが好きな理由かもしれません。

奄美で研修を行うのもあと一年になりました。この一年間休みの日は寝てばかりいたと初めに記しましたが、それでも感じたことはあります。まず奄美はどこに行っても、どんな天気でも、海でも山でも目の前の風景が絵になるということです。これは実際に来てみないと中々実感できないことだと思います。また、関わる人々のあたたかさを感じます。病院で会う患者さんやご家族、ご指導くださる先生方や職員の皆様、街で会う方々、みなさんとても優しく接してくださります。本当に奄美で研修ができる、社会人一年目を過ごせて幸せだったなと思います。残り一年間、様々な奄美を感じて帰ってこられたら、と思います。

今回はこのような機会をください、またお読みくださいまして、ありがとうございました。

次号は、済生会川内病院 小園智樹先生のご執筆です。  
(編集委員会)